

また家族の高齢化がもたらす歯科の問題として、親が磨いてやれなくなる、診察に連れて行けなくなることで疾患が重症化してしまうことを挙げられました。遠方の障がい者歯科よりも、地元でかかりつけの歯科を見つけて通院を続けること、そして将来家族の負担を軽減するために、支援を利用して元気なうちから口腔ケア力の分散、移行を進めることが大切であると結ばれました。

シンポジウムは、福岡市育成会前理事長の向井公太氏が「住み慣れた地域で暮らす為に必要な準備について」、鹿児島県にある(社福)ゆうかり理事長の水流源彦氏が「地域生活支援拠点について」、国立のぞみの園次長の古川慎治氏が「地域移行等、のぞみの園での高齢者支援について」発表がありました。

障がいの人が高齢化することは二重のハンデを負うことですが、親の不変の願いは親亡き後も子どもが幸せに暮らしていけることで、その為の支援の在り方や課題について勉強することができた分科会でした。

分科会 Dコース
ほほえみあふれる「暮らし」の支援
難波支援学校支部 長谷川 美智代

分科会のDコースは、「みつけよう、はじめよう、自分らしい暮らしを!!」をテーマに前半は、毎日新聞社論説委員 野沢和弘氏による基調講演、後半は、シンポジウムが行われました。

野沢氏の講演は、東大ゼミの学生たちと一緒にシアトルツアーに行き、知的・発達障がい児の親に向けた講演会を行ったことや意思決定支援、合理的配慮等の話を織り交ぜた内容でした。シアトルには、野沢氏とお付き合いのある障がい児の父親がおられ、その方は当時の日本では、自閉症の子を育てられないと思い、15年前によりよき生活環境を求めて日本からシアトルに移り住んだそうです。ところが、野沢氏の日本の障害福祉制度についての講演を聞いていたその父親が、突然泣き崩れ「アメリカの福祉は、とても良いと思ったが、それは学齢期の時だけ。卒業すると通うところがない。強度行動障がいの我が子を、母親がずっと自宅で見ている。日本には、我が子が通える場所があるのだろうか。」と話されたそうです。後に、その父親から手紙が届き、近い将来には、日本への帰国を考え始めていると書かれていたそうです。アメリカの居住環境(広くてきれいな住居)は素晴らしく、人々の障がい者に対するまなざしが優しい点は日本と違うところだが、フェアな目で見ると、世界と比較し

て日本の福祉は良くなっていると野沢氏はおっしゃいました。

また、意思決定支援については、障がいのある息子さん(区分6)と回転寿司を食べに行った時のことを話され、エビばかりをとる息子に、つい声をかけたくなるのを「本人の意思を尊重しなければ…」とぐつと我慢する。すると、別の日に食べに行くと息子は、違うものをもって食べていた。好み(意思)は、変容するので、変容に支援者がどこまでついていけるか、本人の意思をどうくみ取るかが大切だと述べられました。そして、合理的配慮については、自閉の子の不登校が増えている。インクルーシブの理念には賛成だが、刺激が多すぎてストレスが溜まる障がい児には、特性に合った環境整備が必要であること。また、日本は、アスリートには配慮があるが、観戦する側の配慮がなされていないこと。それから、特性に配慮した部屋で環境を整え、得意なもの、好きなもの、心地よいものを増やすと、行動障がいが減ってくるという例として、北海道の「はるにれの里グループホーム」の取り組みについての話をされました。

最後に、野沢氏は、「重度の子の親は、施設やお金等、何を残しても安心感はなく、心配。人を育てていくしかないのかと思う。障がい者の魅力をわかってくれる、見出してくれる支援者になってほしい。」と結ばれました。〈分科会Dコース「暮らし」の支援〉



午後からのシンポジウムは、全国手をつなぐ育成会連合会統括 田中正博氏をコーディネーターに、特定非営利活動法人サポートひろがり管理者 山田由美子氏、ぐらすグループ代表 友野剛行氏、京都手をつなぐ育成会理事・知的障害者支援事業所“七” 所長 櫻井基生氏がシンポジストとして登壇され、意思決定支援や成年後見等について発言がありました。中でも、支援者の育成や人材不足については、○事業所がそれぞれの思いで支援を行っているが、基本理念を共有できる仕組み作りが必要。○支援者側は、支援の終了を思い描きながら支援をしなければいけない(自立を考